

ES7000シリーズで実現したサーバ統合とディザスタリカバリ

タカラスタンダード株式会社



ホーロー製品で知られるタカラスタンダード株式会社では、データウェアハウス（以下、DWH）能力の増強と基幹業務サーバの統合を目的に2台のES7000シリーズを導入した。どちらのサーバも2003年8月から本格稼働を開始し、DWH業務では旧システムの4倍以上のリクエストをこなす能力を発揮している。実際、基幹業務では処理時間が従来の1/3に大幅短縮されるなど、その効果は絶大だ。

業種	総合住宅設備機器の製造販売
本社所在地	大阪市城東区
URL	http://www.takara-standard.co.jp/

■ 目標はDWH能力の増強と
■ 基幹業務用サーバの統合

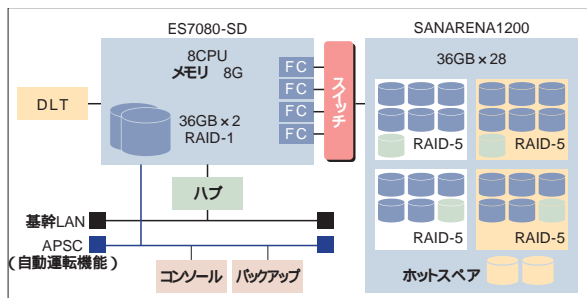
ホーロー製品のタカラスタンダードは、1909年に設立された日本初のホーロー鉄器工場からスタートした。前身となる日本エナメル株式会社の設立は1912年5月、現社名に商号を変更したのは1971年6月だ。工場は全国に10か所、支社と支店は全国に17か所、営業所と出張所は88か所あり、4,694名(2003年3月31日現在)の従業員がシステムキッチン、洗面化粧台、システムバス、給湯器などの製造と販売に携わっている。

そのタカラスタンダードが日本ユニシスのES7000シリーズを導入することになったのは、既設の大型コンピュータをリプレースする必要に迫られたことが直接の理由だったとい

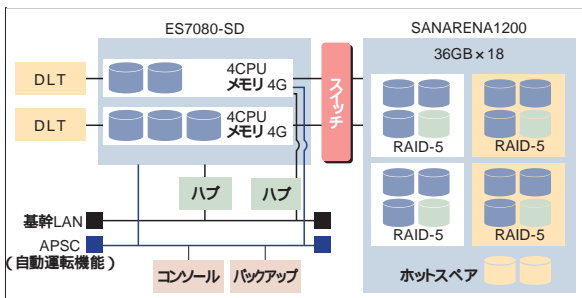
う。既設の1台はDWH用であった。システム管理室課長である樋爪康久氏は、リプレースを決めた理由を「フリーサイズ化が進んで製品の組み合わせ数が爆発的に増え、分析能力に課題を残していた」からだとする。また、DWHの利用者を本社の事務スタッフから最前線の営業マンや担当者にまで広げようとする構想があり、DWH用コンピュータの能力増強は必要に迫られていたのである。

もう一つのリプレース対象領域は基幹業務である。リプレースの理由について樋爪氏は、「それまでは受注、生産、在庫、経理などの業務はメインフレーム、そのほかの業務は複数台のWindowsサーバでこなしていた。しかし、Windowsサーバとメインフレーム間のデータのやりとりがあまりにも煩雑だった」と語る。そのため同社では、これ以上のシステム拡張は不可能と判断し、大型のWindowsサーバに基幹業

DWH構成



基幹業務統合構成



DWHサーバは8CPUのシングルパーティション構成、災害発生時はDWHサーバが基幹業務統合サーバのピンチヒッターを務める(左)。基幹業務統合サーバは4CPUずつのクラスシステム構成だ(右)

務を統合して、処理能力向上とTCO削減を図ることになったという。

■ ■ ディザスタリカバリ ■ ■ 実現させたシステム構成

DWH用サーバの機種選定にあたって、タカラスタンダードはExcelとの親和性を重要な要求仕様として掲げた。ユーザーのほとんどはExcelで分析の仕事をしているからである。2002年1月からさまざまな製品を比較検討した結果、3月にはES7000の導入が決まり、7月にハードウェアとソフトウェアのシステム一式が納入された。その後、12月には基幹業務の明細データをベースとする以前のDWH機能の移行を完了。SQL Server2000のキューブ機能とクライアント側のExcelを連携させる新システムも翌2003年3月から8月にかけて順次リリースされた。パフォーマンスを重視して、8CPUを搭載したES7000はシングルパーティションで運用されている。

もう一つの基幹業務統合サーバは、初めからES7000で構成することを前提に検討と導入が進められた。システム一式が納入されたのは、同じく2002年7月のこと。カスタム開発のCOBOLプログラムで作られていた業務システムはWindows用にコンバートされ、2003年2月から8月にかけて順次新システムに切り替えられた。こちらのサーバも8CPU構成だが、内部は4CPUずつの2パーティションに分けられており、オンライン処理とバッチ処理をそれぞれで実行している。Windowsのクラスシステム(MSCS)を組み合わせられていて、障害発生時は自動的にフェールオーバーが起こる。

さらに、この2台のES7000を利用して、タカラスタンダードではディザスタリカバリも実現した。システム管理室長 上野保長氏は、「システムの重要性はますます高まっている。あらゆる災害に対応できるように、DWHサーバはデータセンターに設置し、統合サーバのバックアップができる仕組みを実現した」と語る。復旧用データとしては、統合サーバのデイレリーバックアップテープが使われるという。

■ ■ DWHでは4倍以上の能力を発揮 ■ ■ 基幹業務ではバッチ処理時間が従来の1/3に

DWH用サーバと基幹業務統合用サーバをES7000にリプレースした結果、タカラスタンダードの情報処理能力は飛躍的に高められることになった。DWH用サーバでは、分析メニューの拡充によって利用者層が拡大。旧システムでは月間3,000から4,000程度だった月間アクセス数が1万2,000以



基幹業務では処理時間が従来の1/3に大幅短縮されるなど最大限の効果を発揮する、ES7000シリーズ

上に増加した。データ保持期間の延長でデータ量も増加しているが、レスポンス速度は良好だ。また、統合サーバではバッチ処理に要する時間が従来の1/3程度になった。前出の樋爪氏は「オンライン処理終了後のバッチ処理も1時間半から2時間程度で完了する」と、その能力を評価している。

現在、タカラスタンダードでは2台のES7000サーバに残されている余力の活用をねらって、さらに多くの業務を移行させようとしている。前出の上野氏は、「業務高度化に対応するためDWHの領域を販売から生産・間接業務系データまで充実させたい。また、プラットフォームの統合が完了した基幹業務ではアプリケーションや機能を統合して一気通貫にデータを活用することを目指す。将来的にはお客様、仕入先、物流関係など社外への情報インターフェースを含めた統合型情報システムへ移行したい」と語る。

1つの筐体に最大32基のCPUを装着でき、CMP方式とパーティショニングで処理能力を自在に調節可能な日本ユニシスのES7000シリーズ。その強大なパワーは、ミッションクリティカルシステムを運用するタカラスタンダードの原動力となっている。

(取材/文 山口学)



システム管理室長 上野保長氏



システム管理室課長 樋爪康久氏